

# 安井息軒著『志濃武草』の注釈（一）

田中司郎

次の記述がある。

- 原本の大きさ…表紙参照
- 著者…安井南陽
- 同行者…なし。

— 旅行の目的及び期間…文政三年九月（陰暦）末日

二泊三日

大阪の学者篠崎小竹に入門のため故郷を離れるにあたり、自分の先祖の墳墓の地である都於郡を尋ね、あわせて高鍋藩明倫堂の教授、綾部氏にあうための一人旅である。

— 道順（上記の「近距離」に同じ。）

## 二 本文試読・語釈・口語訳

### 【凡例】

- 1 仮名遣いは歴史的仮名遣いに拠った。
- 2 漢字は通行字体を用いた。
- 3 反復記号は底本のままとした。

### 【本文試読】

#### 懷舊志序

今茲に庚辰の秋、家弟正に、都於郡より夏口に遊ぶ。其の間に得たる所の詩歌若干首名づけて懷舊志と曰ふ。題言を簡端に請ふ。

### 一 概要

「息軒 滉洲紀行集 道の記」に、「志濃武草の概要」として、

文政三年（一八二〇年）一〇月、大阪遊學が決まつた二三歳の息軒は、故郷の想い出にと藩主伊東氏の古跡都於郡（現西都市）を訪ね、漢詩、和歌、俳句等を中心とした紀行文『志濃武草』を著している。二泊三日の短期間で、近距離（清武中野→源藤→都於郡→高鍋→広瀬→櫛か原→皇宫屋→清武中野）の紀行文である。この紀行文は当時（およそ一八〇年前）の宮崎地方における庶民の生活や文学傾向を垣間見ることのできる一資料である。

内容は、漢詩、和歌に、俳句にと詩情豊かに歌い上げながら青春の息吹きの感じられる紀行文である。

安井息軒が、父滄洲のもとで、成長の過程にあつた青年時代、清武で書き残した唯一の作品であり、息軒最初の著書でもある。

兄清渓が序文を送り、父滄洲にこの書を奉じている。なお、家族の期待を胸に大阪に旅立つた息軒は、翌年の五月一七日、兄清渓の急死にあい、この悲しみのなか猛勉強に明け暮れていいる。

予乃ち之に謂ひて曰く、名は実の標なり。名づけて實に違ふは以て名と為すべからざるなりと。夫都於郡吾藩の墟なり。而して汝臣隸なり。臣隸にして其の墟に遊び、舊時を想ひて今日を見るに誰か能く桑滄の嘆を發せざらんや。汝の此の篇に名づくる意は、蓋し茲に有るか。乃ち之を繙閱するに、城郭臺榭巍然たり。當時に於ては松柏荊棘蒼然たり。今日に於ても宛然と盡く在り。予乃ち慘然として悲しみ喟然として嘆じ、潛然として涕泗交頤す。猶身自から彼の地を逍遙するがごとし。苟も此れを覧る者誰か能く彼を懷ひ興さざらんや。名は之實に與へし稱なりとは蓋し此れ之の謂なり。正に此の篇に名づくる意は必ずや茲に有らんか。

文政三秋九月清渓安井淳子樸序

### 【語訳】

○庚辰の秋—文政三年（一八二〇年）陰曆九月。○正に—「まさに」と訓み、意味は、たしかに、ちょうど。○都於郡—飫肥藩の古跡。○夏口—高鍋町蚊口浦。○懷舊—懷古。過去（昔）のことを思い出し、懷かしみ、しのぶこと。○題言—巻頭の文辞。はしがき。○簡端—文書。手紙の始め。○臣隸—家来。召使い。○—桑滄の嘆—「桑滄の変」「桑海の変」ともいう。出典は、「已見松柏摧為薪 更聞桑田變成海」（劉廷芝「代悲白頭翁」）。陸にあつた桑畠が海底になつてしまつが原義、世の移り変わりの激しいことが転義。「桑田變じて滄海となる」（儲光敷の漢詩）は、「桑畠が變つて青い海になる意から、世の変遷の甚だしい」とのたとえに用いる。○蓋（けだ）し—思うに。副詞。確信的な推定の気持ちを表わす語。例文—蓋し名文だ。○繙閱する—書物を読んで調べること。○城郭—町を囲む城壁（＝城）と城門の外の市街地を囲む城壁（郭）。城の回りの囲い。○臺樹（だいしや）—土を盛り上げた見晴らし台と屋根のある見晴らし台。高殿。○巍然—

むつくりと盛り上がって目立つさま。○松柏—松と柏。とともに常緑樹で色を変えないことから節操・長寿のたとえに用いる。○荊棘—とげが多く、枝のはびこるいばらのこと。○蒼然—青々と草木の生い茂つたさま。○宛然—そつくりそのままに。○慘然—つらい思いをする。心の底にしみ入るようなつらい思いをするさま。○喟然—ため息をついて嘆くさま。嘆息するさま。○潛然—かくれてあらわれないさま。ひそかに燃えるさま。○涕泗—涙と鼻汁。○交頤—おとがい。あごをしゃくりあげるさま。○逍遙—そこそこをぶらぶら歩くこと。○清渓—息軒の兄。安井滄洲の長男。通称文治、字は士朴、諱を朝淳、清は号。墓は清武町中野文宗寺の墓地に在る。

### 【口語訳】

今や庚辰（文政三年 一八二〇年）の秋に、安井家の弟が、まさしく都於郡を通つて夏口（高鍋町蚊口）まで旅をすることになった。

この間に書き記した漢詩、和歌のいくつかを名づけて「懷舊志」と名づける。巻頭の文辞を求められた。そこで、私は懷舊の旅のありのままを述べる。「懷舊志」と名づけたからには旅の様子を述べたものでなければならない。そもそも都於郡は、吾が藩の城跡である。そして、弟は臣下である。臣下の身で城跡に旅し、往時に思いを馳せて、今日の有様をつぶさに見ると、世の移りわりの激しいことを嘆かないでいられようか、嘆かないではいられない。弟が此の篇に「志濃武草」と名づけた気持ちはこの点にあるのかと思う。そこでこの「志濃武草」を読んで見ると、城の囲いは土を盛り上げた見晴らし台と屋根のある見晴らし台が、むつ

くりと盛り上がりがつて目立つてゐるという。当時は松と柏が生い茂り、とげが多く、枝のはびこるいばらが多く、青々と草木が生い茂つてゐたと思われる。今日もそつくりそのままである。自分は心の底にしみ入るような辛い思いをしてため息をつきながら嘆き、涙と鼻汁が見えないようにおとがいをしゃくりあげた。なお、わが身は、都於郡の地をぶらぶら歩くような気持ちである。もしこの「志濃武草」を読む人があれば、あの都於郡の地を想い起こさないことがあるうか、いや必ず想い起こすであろう。名はそのもの実体につけた呼び名であることはこのことを言うのである。まさしく此の書に「志濃武草」と名づけた本意はこの点にあるのであらうか。

文政三年秋九月清溪安井淳子権序文

志濃武草

## 【本文試読】

文政三といふ年都に物学にまからんと思ひ立事侍り。三年の思

ひ出に都於郡の古にし跡見てんと長月の晦日ばかり散はつる紅葉を幣と手向て立出けるを多の大人達詩發句もて馬の餓し玉ふをここに記して家路の錦とはなしぬ。

南陽君都於郡の舊跡を探り高鍋邊に風雅の友を訪玉ふを送り奉る。

帰り待ん野山の錦とり揃へ 史稽

やゝ寒し重袴着玉へ旅ころも 士誠

詩作りて送れる菊の名残かな 水哉

安井子元君の都於郡に遊ぶを送り奉る

河梁風意冷たく 強く勧む両三盃 月色沈々として没し 秋聲寂々と聞く 今朝遙かに別れ去り 何れの日にか又帰り来る 預け識す途中の景 懸應に宋玉の才を誇るべし

平易直 全

良朋勝を尋ねて扁關を出づ 銀漢西に流る漏響の間 行色冬迎荒駅の外 離情曉冷古松の間 浮舟城上雲浪のごとく 双石峯頭月環に似たり 四望佳光画骨を顯す 題し来る北嶺と南山と

長倉寛 瓢酒三盃一笑の歎 變成離恨醉ひて吟じ難く 高山北を擁りて風

聲勁し 片月西に沈みて水色寒し 分手路傍紅樹動き 頭を擧ぐれば城上白雲残る 知らず仙跡何れの邊か是なる 別後蕭條として晩看に向ふ

長安信 全

親友今朝古城に赴く 河梁自から発す別離の情 唯期す他日君帰るの日 花立臺邊置酒して迎へん

湯貞固

無限清霜の路 間行暫留らず 雁飛ぶ平野の外 煙起つ峻峯の頭初日紅楓映へ 凄風碧水流る 共に傾く離別の酒 手に執りて思ひ悠々

病中元君都於郡に遊ぶを聞き此を寄せ以て送り奉る

高元吉

別路手を携へ難く 病中の恨み更に多し 雲杖宵を迎ふ 巴曲君が爲に歌ふ 紅樹應趣を成すを知るべし 彩毫寔に奈何せん 正に知る 錦囊の裡 到る處烟波を貯ふ

弟正に都於郡に遊ぶを送る

野義比

子 横

共に酌す繩酒のごとし 別筵一笑の者 暁光戸の隙を穿ち 秋色  
雲端に溢つ 門外時に杖を求め 江頭寔に冠を濯ふ 縦ひ三日の  
望となるも 行け盤桓する莫れ

二十六日の月やゝ上る頃、杖笠取出て家の大人に續きて奉りける

別としいへばけさだに悲しき三年の秋を思ひやらるる

戯れに家兄及諸君に留別す

常道凡骨を愁ふ 凡骨何ぞ愁るに足らん 蓬萊を我收めに到れば  
常に仙を友として遊ばしむ

花立に至れば海の音いどこわくしく聞へて横雲の隙より朝日  
ほのめきいでぬ 是なん國の名の由縁なりける  
日に迎ふ民の心しまめなれば君の忠ぞ照りまさりける

### 【語釈】

○物学—学問。物事を学ぶ。○侍り—「あります」の意の丁寧語。読者を意識した時に用いられることがある。○長月—陰曆九月の異称。○晦日—みそか(三十日)。月の第三十番目の日。転じて、月の末日をいう。尽日。つごもり。○幣—旅行の折に紙または絹を細かに切つたものを用い、道端の神に奉つた。○手向—神仏に幣帛(神に奉納する物の総称)・花・香等を供えること。○大人—うし(領有し支配する人の称。転じて貴人の尊称。師匠・学者の尊称)。○発句—俳諧発句の第一句が独立して、一作品として作られたもの。○風雅—詩歌・文章の道。文芸。蕉門では俳諧をいう。○安井子—「子」は、学問があり、人格のすぐれた人の名につける敬称。○元君—「元」は、大きい、善の意。善君。○河梁—河にかけた橋。または、送別の地。○沈々—奥深く静かなさ

ま。○宋玉—中国、戦国時代(前四〇三～二二一)の詩人。屈原と同郷で私淑し、その影響を受けた。作「九弁」「神女賦」「高唐賦」がある。○才—持ち前の能力。事をなしとげる力。○銀漢—银河。天の川のこと。○漏響—水の漏れる響き。○荒駅—荒れた宿場。○四望—四眺。あたりをながめること。四方をながめること。○瓢酒—瓢箪の中の酒。○变成—あるものが変わつて他のものになること。また、あるものを他のものにすること。○離恨—人との別れ時の悲しい気持ち。別れのつらさ。○擁る—取り囲む。抱いたようにすっぽりと包む。○分手—人と人が別れること。○頭を擧ぐ—頭をあげる。まつすぐ向いた状態やうつむいた状態から上方へ顔を向ける。○蕭條と—細々として寂しいこと。○花立臺—花立は清武町中野の地名。○間行—間道を通りて行くこと。人に気づかれないようにしてこつそり出かけること。○平野—清武町の地名。○巴曲—自作の詩や歌を謙遜していることば。○彩毫—いろいろをつける筆のこと。○錦囊—作った詩の原稿を入れておく袋。唐の李賀が、よい詩ができると錦で作った袋に入れておいた故事からよい詩のたとえ。○繩酒—繩は、ほめる。○別筵—別れの酒盛り。別宴。筵は敷物。○盤桓—ひと所を回り歩いて進みがたいさま。ぐずぐずして決心のつかないさま。○留別—別れて去つて行く人が、留まる人に別れを告げること。○常道—人が常に守るべき、永遠に変わることのない道。○凡骨—平凡な人間。○蓬萊—想像上の山の名。蓬萊山にあるという、仙人の住む宮殿。○是なん—「なん」は、「なむ」の「む」が撥音便化したもの。「なん」の結びは「ける」で強調表現。「なん」は、係助詞で、上の語を強く指示して意味を強める。○由縁—事物の由来。わけ。○心し—「し」は、上の語を強く指示して、意味を強める

係助詞。平安時代、「しそ」「しも」等、よく用いられる。○まめなれ—ナリ活用の形容動詞「まめなり」の已然形。忠実なさま。勤勉なさま。「まめ」に「実・忠実」をあてる。

## 【口語訳】

志濃武草

南陽安井正子元著

文政三年（一八二〇年）に学問しようと決心した。三年の思い出に都於郡の古跡を見ようと、旧暦九月三十日ごろ、散り終わる紅葉を道祖神に奉る幣と思つてさしあげ、旅立とうとしたのだが、多くの人々が漢詩や発句を作り、旅のお餞別となさつたことを書き残して、わが家に残す旅路の日記とした。

南陽君が都於郡の旧跡を探勝し、高鍋辺りの詩歌・文章の道を研鑽する友を訪問なさるのをお送り申し上げる。

野山の美しいものを採り揃え、無事のお帰りを待つ。 史稽  
少し寒気が感じられる旅路に重ね着をなさいませ。 垂瓢

陰曆九月晦日、雁の音を耳にしながらつなぎ旅路を祈る。

士誠

菊の節句の余韻が残る九月の末に、漢詩を送別にして無事の旅路を祈る。

水哉

安井子元君が都於郡に旅立つのをお送り申し上げる。

野義比

送別の地の風は心なしか冷たく、重ねての盃を強く勧められる。奥深く静かな月は山の端に暮れ、寂しい秋の声を耳にすることができる。今や朝方、旅路について離別し、いつ無事に家路をたどることができるであろうか。旅路の最中での景勝は、才子である應宋玉のように漢詩に託したい。

良き友は景勝を尋ねて扁闌を後に旅立つ。天の川は西に渡り、水の流れ漏れる響きが聞こえてくるようである。旅路の景色は冬を思われる。荒れた宿場の外の、古松の間で別れの心が曉の冷気のためか冷たく感じられる。古松は浮舟城の雲波のようであり、また、双石が峯の頂きにあって、月の輪を見るようである。あたりを眺めると美しい光が画となつて顯れる。題して北嶺と南嶺と。  
同 長倉寛  
瓢箪の酒をいくつも重ね、笑ううちに酔い、離別の心を吟じにくくなる。高い山は北を従え、風は強い。三日月は西に沈んで流れ水は寒々としている。分かれ行く先の紅葉した木々はざわめき、頭をあげると、城の上に白雲が残つてゐる。こうしてみると、仙人の住まいの跡はどのあたりかわからない。別れた後、細々としても寂しい晩秋を看ることである。

長安信

親友は今朝古城に出発した。川にかけた橋は別離の情を自ずと發する。無事君が帰つて来る日をただ待ちわびている。帰着の日は、花立台（清武町中野）で酒を準備して無事の帰りを迎えようと思う。

湯貞固

限りなく続き、清らかな霜の降りてゐる間道を留まることなく歩みを進めると、平野の辺りで雁行が見える。高い峯の頂きに煙が立ち上つてゐる。日の出に楓は映え、激しい風が吹く中、青く美しい水が流れている。共に離別の酒を酌み交わし、手を取りあつて悠々とした思いに耽る。

病の中で元君が都於郡の城跡を訪ねると聞き、此の漢詩をお餞

平易直

別としてお送り申し上げる。

高元吉

いやが上にも照り勝ることである。

病のため別れ路に手を携えがたく、心中の残念さは、ますます多くなる。諸方を巡り歩く杖は宵を迎える。巴曲を君のために歌うことにする。紅の木々はきっと興趣を増すだろう。いろいろをつけた筆致はどうしたらよかろうか。すばらしい漢詩のできていることが今にもわかるであろう。至るところ水面はもやが立ちこめている。

弟の今にも都於郡に旅立ちしようとするところを送る。子樸共に酌をしていると繩酒を酌み交わしているかのようである。別れの酒盛りの席でちよつと笑うものがいるかと思うと、一方では暁の光が戸の隙間から差し込む。秋の景色が雲の端々にいっぱい見られる。よい潮時に門外で杖を探し、江頭で冠を洗い清める。たとえ三日の眺望となつても、ぐずぐずしないで旅立てる。

二十六日の月がやゝ上るころに、杖と笠を取り出して家の大人

に読んで差し上げる。

別れと言えば、いろいろ思いやられるが、いよいよ今朝旅立つことになり、三年の秋が思いやられる。

おどけた姿で家兄と諸君に別れの挨拶をする。

平凡な人間は、人が守るべき、永遠に変わることのない道を守れないことに思い沈む。蓬萊山にあるという仙人の住む宮殿を手に入れようとして、いつも仙人を伴として旅をすることである。

花立に到着すると、海の音が荒々しく聞こえ、横にたなびく雲の間から朝日がほのかに見えてきた。このことが国名の由来だったのだなあ。

朝日を迎える人民の心はいつも忠実であるので君主の忠実な心は

【本文試読】

加納村にて

明けりな櫓が川いでぬ歌翁

橋に源藤の名を以ふるは蓋し中古の世、源氏藤氏の此の溪を以て疆と爲したる故の名なり。然れども此れ固より臆見にして、姑く記して以て後考に備ふと云ふ。

寂々たり長橋の上 微風旅装に冷ややかなり 城頭の月已に没し

始めて識る夜來の霜

曾井城に登る

城は吾藩の下邑の墟なり

痴心寂寞を憐み 謾訪す旧皇の京 試みに秋色を悲しまんと欲して

先づ登る曾井の城

赤江を臨む

赤江或いは曰く赤沢即ち地神の世の所謂小戸の川なり。源は躊躇の峯に出るも未だ所を詳らかにせず。経流する處は東流すること

二百餘里赤江と爲りて海に入る。

山落ち吟じ過ぐるも又水村 畏くる處大江蟠す 三竿に日は上る潮煙の外 一片輕舟海門を出づ

ある谷川に里人多く集り居けるか橋壊れたり、下へ廻り玉へと人々に罵るにそ端なくも本の道へ立帰りて  
紅葉ばやはしなく川に往あたり

郊頭即時

山田の収め未だ盡きず 夫女新晴を喜ぶ 白髪誰が家の叟ぞ 相迎

へて姓名を問ふ

屈原が著しにあらねと沢畔に吟して柏田の川に至る。舟遅れし間の朝けしきいと面白かりければ

芦の穂や折りく響く棹の歌

### 【語釈】

○明けりなー「な」は、詠嘆の終助詞。○櫓—刈り取った稻の株から再び生える稻。○臆見—自分一人の考え。また、あて推量の考え。○下邑—国都以外の町。辺地の町。○痴心—愚かな心。

寂寞—寂しく静かなさま。○謾訪す—そぞろに訪れる事。○秋色—秋の景色。また、秋の気配。○小戸の川—「小戸」は、小さい水門。川の落ち口。『古事記』(上巻、身禊)に「伊耶那岐の大神詔りたまひしく(中略)筑紫の日向の橋の小門の阿波岐原に到りまして、禊ぎ祓へたまひき。」、『日本書記』卷第一に「筑紫の日向の小戸の橋の原に至りまして、祓ぎ除へたまふ。」とある。

○躊躇—「躊」はつづじ。「躅」は、行き惱む。ふむ。○江蟠—「蟠」は、わだかまる、まがるの意。○三竿一日が高くのぼつたさま。竿を三本ついたほどの高さを言い、午前八時ごろ。○端なく一ふと。思ひがけなくの意で品詞は副詞。○郊頭—田野のほとり。○即時—事物にふれてその場のことを題材として詩をつくること。○新晴—雨上がり。又、雨後の晴天。新たに晴れること。

○屈原—中国、戦国時代の楚の人。名は平、字は原。また、名を正則、字を靈均ともいう。楚の王族に生れ、王の側近として活躍したが妬まれて失脚し、湘江のほとりをさまよい、ついに汨羅に投身した。憂國の情をもつて歌う自伝的叙事詩「離騷」を始め、楚の歌謡を本とした楚辞文学を集大成した。前三四三頃(前二七七頃)(広辞苑第四版)○芦の穂や—「や」は切れ字で終助詞。「芦の穂」が感動の中心で、秋の季語。「芦の穂」で季節感を表現。

### 【口語訳】 加納村で

歌翁が、夜が明けたなあ。櫓を動かして川を舟出したと櫓歌を詠んだ。

源藤のことを題材として漢詩を作った。

橋に源藤の名を用いているのは、思うに中古の世に、源氏と藤氏がこの溪を疆としていたからであろう。しかし、このことは、自分一人の考観であつて、とりあえず記して、後々の考察に備えたと思う。

長い橋の上はひつそりと静まりかえつてゐる。かすかに吹く風は旅支度をしていると冷え冷えとしている。城壁のあたりの月はもはや沈んで始めて前の晩から霜の降りてゐるのを知る。

曾井城に登る。

曾井城は吾藩の下邑の城跡である。

夢中である心は寂しく静かで城跡に心引かれる。その旧跡である曾井城を訪れた。城の秋景色は、今にも胸がつまるせつない感じであった。

赤江を望み見る。

赤江もしくは赤沢は、神代の時代のいわゆる小戸の川である。源はつづじの峰に発するというが、未詳である源から川は東流して二百里余り、赤江の地となつて海にそそぎいる。

山がなくなつて吟詠しながら行くと、また水辺の村に着く。水辺の村が尽きるところは大きな入り江となり曲がつてゐる。竿を三本ついたほどの高さに日はのぼり、潮水のしぶきが煙のように見える。一そうの小舟が海峡を出て行く。

とある谷川に村人がたくさん集まつてゐるが、橋が壊れている。

下流へ回りなさいと、それぞれ言い騒ぐので、回つてみると、思  
いがけなくも本の道へ帰つた。見ると紅葉なのであろうか、思  
がけなく川に行きあたつた。

田野のほとりを題材として漢詩を作つた。

山田の取り入れはまだ終わっていないので、夫婦は雨後の晴天を喜  
んでいる。白髪の叟はどの家人であろうか、愛想よく迎えて姓名  
を尋ねる。

「漁父の辞」に登場する屈原が著したものではないけれども、沢  
のほとりで吟詠して柏田川に着いた。

渡し舟が遅れて来る間の朝景色がとても興趣深いので一句詠んだ。  
葦の穂がいっぱい見えるあたりに、ときどき舟を漕ぐ棹の音が響い  
ていることだ

#### 【本文試読】

##### 山行

柏田の市より村に至る山間の路名づけて長篠坂と謂ふ。蓋し其の  
産を取るなり。其の地たるや峯嶺重々として復他の眺望なし。然  
れども丘壑幽邃卒に奇観多し。亦吾徒の一大詞藏と云ふ。

行くく三十里思いを吟じ自ずから西へ東へ山勢多く相似たる  
も秋光獨り同じからず。雲は幽石を圍みて白く樹は小溪の紅に  
もかがやく新句縦に裁るを得れど深く造化の工に慙ず

女郎花の咲残れるにあらぬ道に落ちたりければ是なん遍昭か月  
代したるなりけりと打微笑みて

女郎花右を左へいくたびかゆきくして岩爪に至りぬ

名にし負はばいざや折らん空蟬の世の憂事を岩爪の神

#### 【語訳】

##### 【口語訳】 山歩き。

柏田の町から村に通ずる山間の路を名づけて、長篠坂と言つて  
いる。細くて矢を作るのに適した竹の篠を産出するからであろ

間から離れ、自然にかこまれた土地。○幽邃—もの静かで奥深い  
また、その場所。幽寂。○奇観—珍しい眺め。珍しいみもの。

○山勢—山の勢い。山の姿。山容。○造化—天地の万物を創造し、  
化育すること。また、造物主。○女郎花—「女郎花」に女性を連  
想した僧正遍昭の歌が、『古今集』にある。「秋の野になまめき  
たる女郎花あなかしがまし花もひと時」(古今・一九・雜体・一  
一六) (通釈—秋の野に若々しい美しさを競い合うように立つて  
いる女郎花よ、ああ、うるさい、その美しい盛りもほんの一時の  
ことだよ。) 「名にめでて折れるばかりぞ女郎花我おちにきと人  
にかたるな」(古今・四・秋歌上・二二二六) (通釈—女郎花という  
名前がついていると思つて感心したから折つてみただけだ。女郎  
花よ、私が女性に近づいて堕落したと人に話すな。) 「秋くれば  
野辺に戯れる女郎花いづれの人か摘までみるべき」(古今・一九・  
一〇一七) (通釈—秋になつたので、野辺に女郎花が美しく咲い  
ている。これを摘まないで通り過ぎることが誰にできるだろうか、  
いや誰もできない。) 僧正遍昭は平安前期の歌人。八一六～八九  
〇。僧。六歌仙、三十六歌仙の一人。桓武天皇の孫で、俗名は良  
岑。仁明天皇の寵を受け、左近少将、藏人頭に昇進したが、仁明  
天皇の崩御によつて出家し、京都花山に元慶寺(がんぎょうじ)  
を創立して、坐主となり僧正の位にいたつた。○月代—男の額髪  
を頭の中央にかけて半月形に剃り落としたもの。もと冠の下にあ  
たる部分を剃つた。

う。この地は山々がとても重なりあっていて、他の地を遠く眺めることはできない。しかし、俗世間から離れ、自然に取り囲まれた丘や谷はもの静かで奥深く、珍しい眺めが多い。これもまた、私の山歩きの一つの大きな言葉の宝庫になると言える。

歩みを重ねて三十里、詩歌を作りながら足のむくままに歩き回る。

山々は多くよく似ている。山にあたる秋の日ざしはいろいろである。雲は奥深く静かな石を囲んで白く見え、樹は小道で紅に輝いている。新句を思うように作れると思われるが、造物主のわざには太刀打ちできず恥ずかしい。

僧正遍昭が詠んだ「名にめて折れるばかりぞ女郎花おちにきと人にかかるな」の女郎花の咲き残つてゐるのではない道に出くわしたので、これこそ僧正遍昭の「月代」をしたのであつたと、につこりして次の歌を詠んだ。

女郎花を右に左に見て何度か見て

歩みを進めて岩爪に着いた。

あの有名な女郎花という名をもつてゐるならば、さあ、折り取ろう。そして、この世の辛いことを岩爪の神に祈ろう。

#### 【本文試読】

黒貫寺を過ぐ

浮舟城東南三里に在り　臺閣巍然として　一旧制に仍り　今に於いて當日を見るべき者は獨り此れのみ　古曰く　浮屠氏能く禍を転じて福と爲すとは此れを謂ふなり　抑之を考ふるに吾道犬吠して変ずと謂ふべきのみ　然れども彼の浮屠氏豈是を責むるに足らんや噫

午日肅條と栖鳥鳴き　秋風吹き満つ梵王城　今に至る蘭若台前の

水　注ぎ去りて蓮苟一段と清し

大安寺の桂園公墓に謁し奉る

吾藩の先君諱は義益　寺は後苑に在り

弔い來たる池畔の寺　孤墓は荒庭に立つ　悲氣は三秋に溢ち

百世に馨し　心は衰樹に將に赤くならんとす　松は曼天に入りて

青し　氣障跪坐す蒼苔の上　潛然として涕泗零つ

#### 【語釈】

○黒貫寺—西都市岩爪二〇五〇。開山は、九四六（天慶九）年、隆元僧都によるとされ、土持・伊東・島津の諸領主により厚く尊崇されていた由緒ある寺。高台になつてゐる一帯は、金山鬱蒼とした老杉に覆われ、深山の趣がある閑寂な別天地。古びた本堂・聖觀音像などがある。景行天皇の高屋行宮所といわれる旧跡もある。○臺閣—物見台と高殿。○巍然—梵語。仏をいう。仏教や僧をいう。寺の塔。転じて寺。山の高くて大きいさま。○禍を転じて福と爲す—禍を利用し、それをよく転換して幸福とする。また失敗をも利用し、それを以つて功業をなすという意。『戦国策』（燕卷・第九）に「聖人の事を制するや、禍を転じて福と爲し、敗に因りて功を爲す」、『史記』（蘇秦列伝第九）に「古の事を制する者は、禍を転じて福と爲し、敗に因りて功を爲す」とある。

○犬吠—犬が吠えるまた、その声。○栖鳥—棲息している鳥。やすむ鳥。○梵王城—寺。○蓮苟—はす。○大安寺—都於郡の中心部に近い道路のすぐ東の大安寺は、天正以前伊東氏が都於郡城主であったころ、総昌院と称していた。その後、佐土原藩主島津以久（ゆきひさ）が、大隅福山で戦死した父忠将（ただまさ）の喬墓を作り、一六〇三（慶長八）年、大安寺と改名し、釈迦如来など多くの仏像が安置されている。

## 【口語訳】

黒貫寺を通り過ぎる。

ここから浮舟城は、東南の方向三里のところにある。物見台と高殿は、高く大きい。一つはもとのままで、現在、昔日を物語るものはただこれだけである。いにしえに言うことには、浮屠氏は禍を利用し、それをよく転換して福にしたという。さて、こんなことを考えながらわが道を進めると、犬が吠え、昔日と様変わりしたと言わざるを得ない。しかし、あの浮屠氏をどうして責めることができようか、いやできない。

陰曆五月五日、端午の節句、もの寂しいところに棲息している鳥が鳴き、秋風が寺にいっぱい吹きつけている。現在に至るまで蘭と杜若の台前の水は注がれていて、蓮は一段とすがすがしい。

## 【本文試読】

都於郡の町にて人に答へける辞の句になりて  
新酒や名所古跡を飲あるき

## 【口語訳】

都於郡の町で人々に答えたお別れの句  
名所古跡を訪ねながらできたての新酒を飲み歩いたことだ。

## 【本文試読】

浮舟城

即ち都於郡なり。吾藩世々都せし所なり。慶長年中雀城に移す。  
之後小嶋津氏之有りし故今墟となる。餘韻言欲せざるが故に之を警す。

城頭に舊日を思へば 草木自から相親しみ 八陣の雲空しく起り  
百年露獨り新たなり 山川嶮を設くと雖も 社稷奈ぞ人無からん  
臣悠然と志有り 涙恨巾に満ちて暗む

三葉四葉に殿作せし跡とおもほゆるに松のいと暗う生茂れるを見  
讀りける

常盤なる物とな云そ松が枝も過し昔の秋の色かは

福崎道士を訪ふも遇せず

道士は地理を暗する者なり。吾藩の古を弔う者にして必ず就て謀る。道士輒ち欣然として之に應じ、諄々として倦まず。必ず其の識る所を竭して止む。蓋し亦好古の士と云ふ。

塵士の至るを預知し 採薬せんと山扉を出づ 凡骨従ふを得難く白雲自在に飛ぶ

鳴瀬の灘は城の北になんある。空蝉の世の移り来ぬるまゝに名

さへ流すなりにけるらんとすするに涙溢しぬ

かくはかり鳴瀬の灘と思ひきや幾夜久しき糸の流れの

## 浮舟晚眺

風樹偏に浪のごとく 煙山恰も舟に似たり 流年長へに繫らず嘆息す此の生の浮けるを

## 【語訳】

○浮舟城—『宮崎県の歴史散歩』(山川出版社)に次の記述がある都於郡城は、平地に屹立した自然の山丘を利用して築かれ、西側は断崖で、その外を流れる三財川が外濠の役目を果たし、東・南・北側も断崖や水田を利用した濠などの防御施設があつたものと思われる。この城は別名「浮船城」とも呼ばれ、城下を流れる三財川の流域に城の白壁を映し、名物のアユもここから上流へは上ることができなかつたという。島津氏から飫肥城を奪取(一五六八年)して隆盛をきわめた伊東氏一〇代の三位入道義祐(よしそけ)は、その雄大な姿を、「春は花秋は紅葉に帆を揚げて霧や霞の浮船の城」と詠んだ。

都於郡は、南北朝時代から室町・戦国時代にかけて一四二一年間、伊東氏累代の居城であった。伊東氏が日向国とかかわりをもつようになつたのは、一一九〇（建久元）年、伊東氏の祖工藤祐経（くどうすけつね）が日向の地頭職に任せられたのが始まりであるが、その子祐時（すけとき）から五代の貞祐（さだすけ）までは、みな伊豆に住み、日向には一族を代官として下していた。伊東本家が日向入りしたのは、一三三五（建武二）年のことで、六代の祐持（すけもち）が、足利尊氏に属し、転戦した功によつて都於郡三〇〇町を与えられたことによる。

伊東市は、その全盛期には、都於郡城を中心に四八の出城を持ち「伊東四八城」と称せられた。しかし、一五七二（元亀三）年、島津軍との木崎原の戦いに大敗してからその勢力は衰え、一五七七（天正五）年この城も島津氏によつて落とされた。そして、伊東一族は、親族の大友宗麟を頼つて大分へ落ちていった。なお、のちの天正遣欧使節の伊東マンショの生誕の地は城中といわれる。古代日向の中心が西都なら、中世日向の中心が都於郡である。西都原方面から戦国時代の名残りをとどめる土中（しじゅう）を通り抜けると、都於郡では名刹が多い。黒貫寺がある。伊東・島津・土持の諸領主により厚く尊崇された。

○慶長一島津以久（ゆきひさ）が大隅垂水から佐土原三万石に封じられ、翌年二月佐土原城に入城した。○警す——警。ちらりと見る。○社稷一社は土地の神。稷は穀物の神。君主が居城をたてる時、この二神を王宮の右に祭り、宗廟を左に祭る。転じて、宗廟また国家の意味に用いる。○巾一手拭い。ふきん。○暗む一見えなくなる。目まいがする。目の前が暗くなる。○三葉四葉一壯麗な造りの殿舎が幾棟も建ち並んでいること。また、そのまま。

軒端が三つも四つも重なつてゐるさまかとも言う。○色かは「かは」は、係助詞で反語の意を表す。「やは」と同じ意を表す強調表現。○道士一道教によつて長生不死の術などを身につけた人。道徳のある人。仏道を修行する人。○欣然一喜ぶさま。欣欣然のこと。○諄々一ねんざろに教えるさま。○好古一いにしえを好みこと。昔をしのび慕うこと。○塵士一けがれた世。○預知一前もつて知る。○山扉一山中の家の扉。転じて、山中の家。○すするに思いもよらず、自然にある状態に進んでいく感じをあらわす。○かくばかり一こんなにも。○風樹一風木之悲。○煙山一霧などのかかつた山。

#### 【口語訳】

浮舟城とりもなおさず都於郡である。吾が藩が代々中心の町としたところである。慶長年（一五九六～一六一四）中雀城に移した。この後、小嶋津氏が治めたので今や城跡となつてゐる。自分は今の気持ちをはつきりと述べたくないので浮舟城を一瞥して旅を続ける。

城のいただきに立つてありし日々を思えば、目にする草木に自ずから親しみが湧く。あたりに多くの雲が空しく起こり、多くの歳月を経てきた露はひたすら新たである。城跡を守る山川は、険しいけれども、宗廟に人影はまつたくない。臣下は志をゆつたりと保持しているが、昔日に想いを馳せると涙がはらはらと流れ、視界を失う。

城跡は、壮麗な殿舎が幾棟も建ち並んでいたと思われるが、あたりに松が生い茂つてゐる。これを見て詠んだ歌。

三つ葉四つ葉の殿舎がいついつまでも続くものと言つてはならない。松の枝も昔日の秋のようすで、どうしてあろうか、決してそ

うではない。

福崎道士を訪ねたが会えなかつた。福崎道士は、古城の地理を暗記している方である。吾が藩の城跡を供養する方でしつかりこれから先のことはどうするか相談した。道士はすぐ喜んで私の願いに応じて教えてくれた。自分の知つているところをすべて教えてくれたのである。思うに昔をしのび慕うすぐれた人である。

けがれた世の中がやつて来ることを前もつて知り、薬草を探集しようとして山中にこもり外に出なかつた。凡人はつき従うことが難しく、白雲が自由自在に飛ぶように思うままに旅を続けた。

鳴瀬の瀧は古城の北にある。この世の移り来るままに名さえ流すのであらうと、思いがけなくも涙を流した。

このようになくも涙を流すのであらうか、幾世代も続く糸の流れのよう

#### 浮舟城の夕暮れの眺め

風樹は偏に浪のように揺れ、霧のかかつた山は、あたかも舟のようである。流れ去つた歳月は繫がらず、この世に生まれてきただはないわが身を嘆息するばかりである。

#### 【本文試読】

野路のいと覚束なきに日さへ暮ぬ。何所の里の木綿付鳥聞事なるらんなど心細ふ思ひつゝけて

女郎花いさこの野辺に宿借らん我待虫の声も絶ねば

黄昏の頃日暮しの里潮井に詣てぬ。古き歌には日暮しや氷室の里を咏れば潮の煙いつも絶せぬ。里人は和泉式部歌とそいふなり。かかれば瑞垣の久しき世より有にけん。かくも猶おほつかなし。

日暮しや潮の井筒いつとても絶せぬ物は煙なりけり

潮明神の宮守に宿を請けるが初夜の頃にや有りけん。数多の猿田彦、多力雄たち集り玉ひて、戸開の舞を爲玉ふ。予も八百萬の一人と呼れりければ夜もすがら眠もやらで

筋骨のあらぶる神の一さしに天の岩戸は早明にけり

客曉に雨にならんとす

疎鐘に天曙濕聲聞ゆ 古駅に騫裳し 酒に始めて醺ふ 此れより紅楓三十里 頗る心曲を労し是浮雲

潮井の北に水無瀬山見ゆ

旅衣けさしもおきつみなせ山 紅葉の錦袖にからなん

偶然作

連に朝採薬して去り 始めて入る赤松の群 人世何れの辺りか是なる 四望只白雲のみ

此の日や雲雨漠々として泥濘脛を没して山川の勝復た究むべからず。噫予の不遇たるや自ら已に熟するを知る。猶何ぞ之を造化に望まんや。然れども操心の縁自ら安んずる能はず。悒然として怨み鬱然として思ふ。之を思ふ又思ひ乃ち始めて之を得たり。夫れ春して夏して秋して冬す。昨日は今日にあらず。今日復た來たるべからず。天の常なきこと亦甚だしきかな。乃ち常無しと雖も春は温かく秋の涼しきは古今一なり。此れ天の能く久しき所以なり。天は人を愛し、人は寒暑を惡めども天之が爲に冬夏を廢せず。安にか其れ之を愛すること在らん。然れば財用以て植え、人民以て生す。此れ天の能く愛する所以なり。其れ然るが故に今日の事豈獨り然らざらんや。夫一たび晴れて雨なくんば未だ以て奇觀と爲すに足らず。雨降りて晴なくんば亦何の楽しみか之有らん。既に晴れ且つ雨ふれば幽邃の趣幾ど究むべからざるなり。此れ即ち

造化の予を遇する所以なり。此れ即ち予の楽しむこと能く久しき所以なり。猶何ぞ雲雨之れ嗟かん。

### 【語訳】

○木錦付鳥—鶏の異称。後世、「ゆうづけどり」とも。古代、世の乱れた時、四境の祭りといつて、鶏に木綿（ゆう）をつけて京城四境の関で待つたという故事に基づく。木綿をつけた鳥。○和泉式部一生没年未詳。平安中期の女流歌人。父は大江雅致（おおえのまさむね）。母は、平保衡（たいらのやすひら）。容色美しく、多感な性質で、生涯は奔放な恋愛に終始した。橘道貞（たちばなのみちさだ）の妻として和泉（大阪府）に下り、小式部内侍を生み、後に一条天皇の中宮上東門院に仕え、さらに藤原保昌（ふじわらのやすまさ）の妻となつた。また、爲尊（ためたか）親王およびその弟敦道（あつみち）親王をはじめ、多くの男性と関係があつた。平安朝随一の情熱的歌風の持ち主。『和泉式部集』『和泉式部日記』がある。○瑞垣—神靈の宿る山・森などの周囲に木をめぐらした垣。また広く、神社の周囲の垣。たまがき。いがき。○初夜—戌の刻現在の午後八時から九時頃。夕方から夜半までの稱。○猿田彦—猿田彦神（神代の国つ神の一）。瓊瓈杵尊（ににぎのみこと）が高天原（たかまのはら）から日向国高千穂の峰にくだつた、いわゆる天孫降臨のときに、その道案内をつとめ、のち、伊勢国五十鈴川のほとりに鎮座したといわれる。鼻が非常に高く、身長も非常に高く、恐ろしい顔つきをしていたといふ。古くは「ちまたの神」とされていたが、中世、障（さえ）の神と混同されて道祖神となり、一方、仏教の影響を受けて、「猿」と「申」との混同から「庚申」の日にこの神を祭るようになつた。○多力雄一天の岩屋戸を開いて天照大神を出したという大力の神。○八

百萬—多くの神。○疎鐘—まばらに時を告げる鐘。○醺ふ—ほろよい。少し酔う。○心曲—心のすみ。心の底。また、心。○浮雲—空中に浮かぶ雲。転じて、空に漂う雲のように定まらないこと、はかないこと。不確かで頼りないこと。浮かんでいる雲のように自分とは遠く隔たった存在のもの。○けさ—袈裟。今朝。○しもおき—霜置き。○紅葉の錦—紅葉のようになめしく、その季節にあつた衣服のたとえ。紅葉の美しさを錦に見立てていう語。○偶然作—「偶作」は、偶然に作る作品、詩。○四望—四方を眺める。○漠々—一面に続いているさま。○泥濘—ぬかるみ。どろみち。○不遇—時に遭わないこと。○造化—宇宙万物を造つたもの。造物主。○操心—心身をけがれなく保つこと。○悒然—心が安らかでないさま。○鬱然—氣のふさがるさま。○昨日は今日に非ず—「昨日は今日の昔」（わずか一日前のことでも現在から見ればすでに過去である。月日の経つのは早いものであるということのとえ。光陰矢のごとし。）○今日復た來たるべからず—「盛年重ねて來らず一日再び晨なり難し 時に及んで當に勉励すべし 歲月は人を待たず」（「雜詩」陶潛）を想起させる。

### 【口語訳】

野道はとてもおぼつかないのに日暮れになつてしまつた。どこ の里の鶏の声であろうかと心細く思い続けて  
女郎花よ、さあ、その名を持つてゐるならば、一夜の宿を借りようと思う。私を待つてゐる虫の声も絶えず聞こえるので。  
夕暮れ時、潮井に参詣した。古い歌で、「日暮しや氷室の里を咏れば潮の煙いつも絶せぬ」という歌がある。里人は和泉式部の歌と言つてゐるようである。このようであるから天孫降臨の神代からあつたのであろうか。こういふこともやはりはつきり

しない。

一日中まあ潮の井は、潮煙が見えることだ。

潮明神の宮守に初夜のころであつただろうか。多くの猿田彦、多力雄たちがお集まりになつて、戸開きの舞をなさる。自分も多くの神の一人になつて呼ばれたので一晩中眠りもしないで筋骨のたくましい荒立つ神は一回で天の岩戸は早くもあけてしまつたことだ。

旅のさなかで今にも雨にならうとしている。

まばらに聞こえる鐘の音に夜が明け潤いのある声が聞こえてくる。古い宿場の衣紋に裳裾をかけ、酒にはじめて酔う。この宿場から紅の楓が三十里も続いて、空に浮かび漂う雲の中でとても心労する。

潮井の北に水無瀬山が見える。旅衣の今朝、霜が水無瀬山に降りてくる。紅葉の模様で美しい織物を袖にまといたいものだ。

思いがけなくふとできた漢詩

しきりに朝薬草を探つて去り、始めて赤松の郡に入る。人の住んでいるところはどのあたりであろうか。四方を眺めると白雲のみである。

この日は、雲と雨がずっと続いて、膝はぬかるみに入り込み、

山川の景勝は見届けることはできない。ああ、余の時に遭わないことは自分自身すでに熟知している。どうして不遇から抜け出すことを宇宙を支配する神に望もうか、いや望まない。しかしながら心身をけがれなく保つも、安住できない。心が安らかでなく、

鬱然として思う。鬱然として思い、また思い、そこではじめて安心の境地を。そもそも春が過ぎて、夏になり、秋が来て冬になる。昨日は、既に過ぎ去り、今日は再びおとずれることはない。宇宙

を支配する神のもとでは、常度を越えているものがある。宇宙は度を越えていると言つても、かえつて春は温暖で、秋の涼しさは

昔も今も同じである。宇宙を支配する神は恒久的だからである。

宇宙を支配する神は人を愛し、人は寒さ、暑さを嫌うけれども、天地を支配する神はこのために冬夏を廢することはない。どうして人は、寒さ暑さを愛することがあるうか。だから金銭と物資を

増やし、人民は生活を営んでいる。これは、宇宙を支配する神が人民を愛しているからである。そもそもそうであるがために今日のことはそれだけであるうかいやそうではない。そもそもひとつ晴れて雨がなければ、すばらしい眺めと言うには不足な感じの箇所がある。あめが降つて晴れがなければ何の楽しみがあろうか。何の楽しみもない。もはや晴れてさらに雨が降れば、奥深くて物

静かな趣は究め尽くすことはできない。これがあるから造物主は自分を迎え入れてくれるるのである。このことがとりもなおさず自分の自然を長く楽しむ理由である。どうして雲や雨を嘆こうか。となり海鳴りが時々聞こえたので

#### 【本文試読】

佐土原と財部の間の野道を歩いていくと、犬鷄の声も聞こえな

【口語訳】

秋の野道を歩いて行くと絶えていた海鳴りが時々聞こえてくる。

今回は、安井息軒著『志濃武草』前半の注釈を試みた。次回で終了する予定である。

本稿の『志濃武草』は、平成十五年七月七日、「きよたけ歴史館」で撮影されたコピーを使用した。撮影者は福田徳幸氏である。

コピーの入手にあたり種々のご配慮をいただいた方々に厚くお礼  
申し上げる。

### 使用文献

- 安井息軒著『志濃武草』コピー（宮崎学園図書館蔵 二〇〇三）
- 倉野憲司著『古事記評解』（有精堂 一九六二）
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞著『日本書紀 上・下』  
(岩波書店 一九六七)
- 小沢正夫著『古今和歌集』（岩波書店 一九七一）
- 林秀一著『戦国策 上』（明治書院 一九七七）
- 水沢利忠著『史記 八』（明治書院 一九七〇）
- 宮崎県高等学校歴史部会編『宮崎県の歴史散歩』  
(山川出版社 一九七七)
- 野口逸三郎監修『宮崎県の地名』（平凡社 一九九七）
- 藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫 校注・訳『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』（小学館 一九七一）
- 鎌田正・米川寅太郎共著『漢詩名句辞典』  
(大修館書店 一九八〇)
- 新村出編『広辞苑』第四版（岩波書店 一九九八）

## 懷舊志序

今茲庚辰之秋家弟正遊于都於郡  
于夏口其間所存詩歌若干首名曰  
懷舊志請題言簡端予乃謂之曰  
名者实之標也名而達实不可以爲名  
也夫都於郡者

吾北藩之墟也而汝臣隸也臣隸而遊  
其墟想古舊事而視今日誰能不發  
系滄之嘆哉汝之名此篇意蓋有  
千茲與乃繙閱之城郭基臺榭山巍然於  
當時松柏荆棘蒼然於今日宛然盡  
在焉予乃慘然悲焉喟然嘆焉潛然  
涕泗交頤猶身自逍遙彼地矣為覽  
此者誰能不興懷於彼哉名之與实  
補蓋此之謂也正之名此篇意必  
有千茲矣哉

文政三秋九月清溪安井淳子樸序

志愧武革

南陽 安井正子元

著

文政三年正月都下初學之日因以至  
待之二年四月出奔都於郡古跡臨之  
長生之晦之都於郡之故都之古跡臨之  
立生多之多之大人達詩卷之而事錄  
之小記之而家跡之錦之六句思  
之南陽是都於郡之舊跡之攝之為銘送  
而歸來之音之送之之送之之送之之送之  
之一寄之重游是之旅之久之垂  
詩作之送之之送之之送之之送之之送之  
之奉送安井子元君遊都於郡

河梁風意冷強勦雨三孟月色沈沒秋  
聲寂閑今朝遙別去何日又歸未預識  
途中景應誇宋玉才

平易直

野義比

良明尋勝出局闈銀<sub>道</sub>西流漏響聞行色冬  
徂荒駅外離情晚冷古松間浮舟城上雲  
如浪双石峯頭月似環四望佳光顯画骨  
題東北嶺與南山

全

長安信

瓢酒三盃一笑歡變成離恨醉吟難高山  
北捲風聲歇片月西沈水色寒分半路傍  
紅樹動舉頭城上白雲殘不知仙跡何邊  
是別後蕭條向晚看

全

湯貞固

親友今朝赴古城河深自桑別離情唯期  
他日君歸日花立臺置酒迎

全

伊限清霜路間行不暫留雁飛平野外煙  
霧峻峯頭初日紅帆映淒風碧水流共傾  
離別酒執手思悠、

病中聞子元君遊都於郡寄此以奉送

別路難擣手病中恨更多寒雲迎杖霉巴  
曲爲君歌紅樹庵成趣彩毫定奈何正知  
錦囊埋副遠持因皮

高元吉  
太白雲遊杖

共酌如漣酒別筵一笑看曉光穿戶隱秋  
色溢雲端門外時求杖江頭定濯綯爲  
三日望行矣莫盤桓

牙戶隱秋  
唯舞縫爲

大人到此已年四十  
別來一月已過二年一日故作四言以  
戲留別 家兄及諸君

乞勿  
山行

常道愁心骨。凡骨何足愁。  
蓬萊我收到。帶使伴仙遊。

舊以源蕃名蓋中古之世源氏蕃氏以此溪爲疆故名焉然此固曠見姑記以備後考云

寂：長橋上微風冷。簷裝城頭月已淡。始識夜未霜。

城者吾藩下邑之墟也

痴心惱害寰謠詣旧皇京謠詣悲秋色先  
登曾井城

赤江或曰赤汎即地神氏之世所謂小川也原出鄭賦之云等乎至五道之

戶川也源出跋頭峯東南流二百餘里爲赤江入于海山落吟過又水村水村盡處大江蟠三竿日上湖煙外一片輕舟出海門

德音百世馨心將衰樹赤松入是天青跪  
坐蒼苔上潛然涕泗零

都成郡一里小人所答多辭句  
乃苟而已

浮舟城

增古論卷之三

即都於邵也 吾藩世々所都也慶長  
年中移都雀城之後 小嶋津氏有之故  
今爲墟命不敵時害之故廢之

三事の筆者を定め難い。但し、(1)の筆者は、  
一時、大蔵省主計司に在りて、清正の  
常磐馬場物と曰ふ御料紙幣を之の筆色に  
仿ひて作成したのである。

道士諸古城之地理者也。吾藩伟云者必就而謀焉。道士輒欣然應之。嘵々不倦。必竭其所識而止。蓋亦好古之士。

豫知塵土至採藥出山屢凡骨難得自由自在飛

嘔吐の発作が止まらず、嘔吐の原因がわからず、嘔吐止まらず

漢書

卷之三

浮舟城晚眺  
風樹偏如浪恰  
煙山舟似舟流年長不繫嘆  
息此生浮

野翁の筆を以て書く。日之暮也、何所より  
木屋の事算す。かくして、而して、ゆゑに  
女中花火、奇異甚也。然しも、其得手の所也。  
其處に日暮の里、宿す所無し。古之在  
田舎にて水家の事と呼ぶ。解説の如  
きは、豈ぞ里人か。却て其の事と呼ぶ者  
居らず。久しく、其の事と呼ぶ者無し。かくして、

田舎の井筒の音と風物の聲  
新一神の古宇の布を傳ひる村莊の聲  
有り萬葉の移動度多力聲なる集いあら  
芦笛の舞と歌と手とハ百萬人一石と  
呼れりと山葉も吹け聲をあへて  
歸農の可い神ノ下天の笠を身に早速出立  
客曉故雨

儒學作

連朝採蘂去始入赤松群人世何邊是四  
望只白雲

此日也雲雨漠々泥濘漫腥山川之勝  
不復可究矣嗟予之不遇也自知已喪  
猶何望之造化哉然操心之躁不能自安  
悒然怨焉齷然思焉思之又思乃始得之天  
脊而夏而秋而冬昨日非今日  
今日不復可求天之每常亦甚哉雖乃  
僉常春暖秋涼古今一也此天所以能  
久也天愛人人惡寒暑天不爲之廢冬  
夏安在其愛之哉然財用以植焉人民  
以生焉此天所以能愛也其然今日之  
事豈獨不然夫一千晴而每雨未足以  
爲奇觀而每晴亦何樂之有既晴且  
雨幽邃之趣幾不可究焉此即造化所  
以遇予也此即予樂所以能久也猶何  
雲雨之嗟焉

山川之鄙氣不得近仙骨耳大隱隱市城  
蓋足下之謂也嘻巴調一篇聊訢歎々幸  
賜潤色頌首

財部藩學者奉唱宋學不解久革乃曰  
玩文喪志綾部式頗脫其範圍者也故

輕率の如きは勿論而して何等かの深重な事の字も下さるが其讀法は未だ決めてゐぬ。

第三章 我々の生活と常便年賀。調理器具  
数々の物の名前を記しておとづれの歌詞  
歌詞一覧

夏口江頭滿岸家相從。樵父訪漁翁。主人  
頗嗜靜中味。旅館初退世。上峰百里鄉。  
遙愁雨色三更舟。落對蠻華四簷。猶自每晴  
意。閒聽波濤剪綠葦。

雨中夏口浦  
濛々前路暗蓑笠出江村怪此窮途者  
蒙雨露恩

浦山の道才果て初を引西寺草堂にて常草  
間也尼「今度中間は寺の事外に」既て遠絶  
近説人なども、ソトモ聖壽御 加久時日也  
旅のあつて、其の御風氣あり

距夏口浦南五里有瀑布高五丈幅三  
丈怪石奇樹巖々鬱々其淵深境二

大壯觀也名曰於雀灤里人曰在昔有  
於雀者里中女也自投而死故名焉予  
病其名不雅馴乃改以雄作雄雀灤歌  
雄雀翩々下九天王喬吹笙響凜然忘從  
西極崑崙至羽辟毛毳飲醴泉黃石赤松  
爭保護片雲垂翼一千年餘波遠注人間  
世斟得下匏便得仙頻年嘗毎究源客彩  
霧掩蘿玉宮邊找亦名姓錄仙籍暫謫人  
間隱詩篇太白縱橫不足屑墟山幽貴坐  
相庭吾汝高鳴九臯上更使令聲聞九天

大抵の御のせんが爲めにかく様  
業の爲めにかく様の爲めにかく様  
那の爲めにかく様の爲めにかく様  
かく様の爲めにかく様の爲めにかく様

講者海上十餘程白礪青松徹夜清不嘆  
前津風浪惡久拏火世利將名  
荒磯海波打打打打打打打打打打打打  
謝去去去去去去去去去去去去去去去去

烟雨渡三方津

郎德河也三泖牙出故曰三方津一葉飄然伴白鷺三洲十曲不勝秋中流迴首唯烟雨誰道蓬萊竟可求

新見の吹き出物も、また

嚴是濟家屋  
山水勸霞盃霞盃  
妙才錢囊盡倒去却  
入詩囊未

楊公原八重，  
監院三箇經年。  
所居多在林中，  
不與人爭名利。

予早知其事也。萬事上與下為之，雖  
滿清之多事，亦可少以清之而免之。但  
冷言一折，遂可使清之而免之。每

海小舟八重の葉落とす風に吹く神の音和風  
松林晚歩  
松林行不盡岐路自縱橫西轉將南折略  
知物外情

奉謁

神武天皇祠

武皇者人皇第一世帝也初都于比  
東征清中原乃移都大和距今蓋三十年  
許 祠在壠東七里歲時之祀至今不  
絕云然未詳所立歲及土人自貯穀祀  
乎否半

風寒交侵自離々萬古  
日東遷何用嘆神靈有小祠今  
孤特の通す乞皇威遠勝此都時  
きのう此山門邊到外  
母人めのひとの歸かへりの情じやう  
江店沽く醉ざい城じゆ鐘かね瘦やせ二更前まへ山さん猶よう雨あめ色いろ舊きゅう  
澗せき大泉おほいずみ聲こゑ村むら靜しづか驚おどろ危き吠ほ炬ひき明あか賈客かき行ゆ唯ただ懼おそ  
家室いえむろ上う更また滄なづ倚よ門もん情じやう  
帰かへ夢ゆめ奉まつ呈しゆう

泥路坦如破連朝桑與奇囊中每可歎唯  
大人記數篇詩

婦家奉呈

鳥鳴山夕晴  
日落山中盡俗埃  
仙丹不可得空  
半又歸未

懷舊志終